

$\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ への double cover を与える surface X の構造の考察

5107A045-1 丹羽 久

早稲田大学院基幹理工学研究科数学応用数理専攻
(楫 元研究室)

2009年2月1日

1 概要

この論文は、タイトルにもあるように $\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ への double cover を与える surface X について、 $\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ の branch locus の次数が低い場合の一部について調べたものである。研究のテーマにした動機は、代数幾何において double cover については昔からあつかわれるテーマで 自分も学部ころから興味をもってやっていたからである。そこで今回は自分にできる考察の対象として $\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ について調べることにした。はじめにこの論文を読む上で必要になる定義、定理をいくつか示し、そのうえで話を進めていきたい。

2 定義, 定理

2.1 複素多様体

M を位相空間とし, M が複素多様体とは次の (1) ~ (4) が成立するときをいう

(1) M は連結ハウスドルフ空間

(2) $\forall i \in I \ U_i \subset M$ かつ $M = \bigcup_{i \in I} U_i$

(3) $\forall i \in I \ u_i \subset \mathbb{C}^n \ \varphi_i : U_i \longrightarrow u_i$, 同相写像

(4) $U_i \cap U_j \neq \emptyset$ となる $\forall i, \forall j \in I$ について, $\varphi_{ij} = \varphi_j \circ \varphi_i^{-1} |_{u_{ij}}$

また U_i, φ_i をそれぞれ座標近傍, 座標関数と呼び, (U_i, φ_i) を座標近傍系と呼ぶ. 1次元複素多様体をリーマン面と呼ぶ.

2.2 pre sheaf

X を位相空間とし, Ω を X の開集合全体とすると, $\forall U \in \Omega$ にたいして \mathbb{C} 上のベクトル空間 $\mathcal{F}(U)$ が定まる. また $\forall U, \forall V \in \Omega$ のとき $\gamma_{U,V} : \mathcal{F}(U) \longrightarrow \mathcal{F}(V)$ 準同型写像が定まり, 次の (1) ~ (3) がいえるとき, \mathcal{F} は pre sheaf という.

(1) $\mathcal{F}(\emptyset) = \{0\}$

(2) $\gamma_{U,U} : \mathcal{F}(U) \longrightarrow \mathcal{F}(U) = id_{\mathcal{F}(U)}$

(3) $\forall W, U, V \in \Omega \ W \subset V \subset U$ のとき $\gamma_{W,U} = \gamma_{W,V} \circ \gamma_{V,U}$ となる, つまり可換である.

また $\mathcal{F}(U) = \Gamma(U, \mathcal{F})$ と表し, ここでの $\gamma_{V,U}$ とは下のような制限写像を表す.

$\gamma_{V,U} : \mathcal{F}(U) \longrightarrow \mathcal{F}(V)$

$f \in \mathcal{F}(U), \ \gamma_{V,U}(f) \in \mathcal{F}(V) \quad f \mapsto \gamma_{V,U}(f) = f|_V$

$\mathcal{F}(U)$ の元を, U 上の f の section(切断) といい, $U = X$ のとき, $\mathcal{F}(X)$ の元を f の global section (大域切断) という.

2.3 stalk

f を X 上の pre sheaf, $p \in X$ にたいして $\Omega_p = \{U \in \Omega \mid p \in U\}$ とする. ここで $\bigcup_{U \in \Omega_p} \mathcal{F}(U)$ を互いに交わらない和 (disjoint union) となるようにとる. $a, b \in \bigcup_{U \in \Omega_p} \mathcal{F}(U)$ をとり, 今 $a \in \mathcal{F}(U_a), b \in \mathcal{F}(U_b)$ となっているとする.

このとき次の \sim は同値関係である

$a \sim b \iff \exists W \in \Omega_p \ s.t \ W \subset U_a \cap U_b \quad a|_W = b|_W$

そして $\mathcal{F}_p = (\bigcup_{U \in \Omega_p} \mathcal{F}(U)) / \sim$ とし, これを, \mathcal{F} の p での stalk という.

$a \in \mathcal{F}(U)$ の定める \mathcal{F}_p の元を a_p であらわし, a の p における germ という.

これらの定義をまとめると次のとおりである.

$\forall \alpha \in \mathcal{F}_p \ \exists U \in \Omega_p \ \exists a \in \mathcal{F}(U) \ s.t \ a_p = \alpha$

2.4 sheaf

\mathcal{F} が sheaf とは, pre sheaf であり, さらに次が成立するときをいう

$\forall U \in \Omega \quad U = \bigcup_{i \in I} U_i \quad U_i$ の開被覆とする

$$(1) f \in \mathcal{F}(U) \quad \forall i \in I \quad \gamma_{U_i, U}(f) = 0 \implies f = 0$$

$$(2) (f_i)_{i \in I} \in \prod_{i \in I} \mathcal{F}(U_i) \quad s.t. \forall i, j \quad \gamma_{U_i \cap U_j, U_i}(f_i) = \gamma_{U_i \cap U_j, U_j}(f_j)$$

$$\implies \exists f \in \mathcal{F}(U) \quad s.t. \quad \forall i \in I \quad f|_{U_i} = f_i$$

以上が成立するとき \mathcal{F} は X の sheaf である. また sheaf の stalk は pre sheaf のそれである.

2.5 sheaf の exact sequence

\mathcal{F}_i を X 上の sheaf とし, $\varphi_i: \mathcal{F}_i \longrightarrow \mathcal{F}_{i+1}$ を sheaf 間の準同型写像とする. このとき

$\dots \xrightarrow{\varphi_{i-2}} \mathcal{F}_{i-1} \xrightarrow{\varphi_{i-1}} \mathcal{F}_i \xrightarrow{\varphi_i} \mathcal{F}_{i+1} \xrightarrow{\varphi_{i+1}} \dots$ が exact sequence であるとは

$\iff \forall p \in X$ に対して, それらの stalk 間の準同型写像

$\dots \xrightarrow{\varphi_{i-2,p}} \mathcal{F}_{i-1,p} \xrightarrow{\varphi_{i-1,p}} \mathcal{F}_{i,p} \xrightarrow{\varphi_{i,p}} \mathcal{F}_{i+1,p} \xrightarrow{\varphi_{i+1,p}} \dots$ が exact sequence であるときをいう

ここで次の sheaf の系列を考える

$$0 \longrightarrow \mathcal{F} \xrightarrow{\alpha} \mathcal{G} \xrightarrow{\beta} \mathcal{H} \longrightarrow 0 \quad \text{これが exact sequence であるとき (これが exact sequence}$$

であることは α_p が単射 β_p が全射であることからいえる), 次の系列は exact sequence である.

$$0 \longrightarrow \mathcal{F}(U) \xrightarrow{\alpha_U} \mathcal{G}(U) \xrightarrow{\beta_U} \mathcal{H}(U) \longrightarrow \quad (\text{証明は省略})$$

このうえで $\varphi: \mathcal{F} \longrightarrow \mathcal{G}$ としたときの $\text{Ker} \varphi, \text{Im} \varphi, \text{Coker} \varphi$ を定義する.

$\text{Ker} \varphi$ とは次の (1), (2) が成立するときをいう

(1) $\text{Ker} \varphi$ は X 上の sheaf

(2) $0 \longrightarrow \text{Ker} \varphi \longrightarrow \mathcal{F} \xrightarrow{\varphi} \mathcal{G}$ が exact sequence

また, $(\text{Ker} \varphi)_p = \text{Ker} \varphi_p$ である

$\text{Coker} \varphi$ とは次の (1), (2) が成立するときをいう

(1) $\text{Coker} \varphi$ は X 上の sheaf

(2) $\mathcal{F} \xrightarrow{\varphi} \mathcal{G} \longrightarrow \text{Coker} \varphi \longrightarrow 0$ が exact sequence

また, $(\text{Coker} \varphi)_p = \text{Coker} \varphi_p$ である

$\text{Im} \varphi$ とは次の (1), (2) が成立するときをいう

(1) $\text{Im} \varphi$ は X 上の sheaf

(2) $\mathcal{F} \xrightarrow{\varphi} \mathcal{G} \xrightarrow{\pi} \text{Coker} \varphi \longrightarrow 0$ が exact sequence

このとき $\text{Im} \varphi = \text{Ker} \pi$ である. また $(\text{Im} \varphi)_p = \text{Im} \varphi_p$ である.

2.6 コホモロジー群

X を位相空間とし, Ω を X 上の開集合全体とする. \mathcal{F} を X 上の sheaf で \mathcal{F} は flabby であるとする.

($\iff \forall U \in \Omega \quad \mathcal{F}(X) \xrightarrow{\gamma_{U,X}} \mathcal{F}(U)$ が全射)

$U \in \Omega$ にたいして, $C^0(\mathcal{F})(U) = \prod_{p \in U} \mathcal{F}_p$ とおくと, これは $\gamma_{V,U}$ を自然な射影で定義すれば X 上の sheaf であつ flabby である.

ここで $\iota: \mathcal{F} \longrightarrow C^0(\mathcal{F})$ という写像の $\text{Ker}\iota$ を調べると, $\text{Ker}\iota = 0$ となる. つまり

$0 \longrightarrow \text{Ker}\iota \longrightarrow \mathcal{F} \xrightarrow{\iota} C^0(\mathcal{F})$ が exact sequence であったので

$0 \longrightarrow \mathcal{F} \xrightarrow{\iota} C^0(\mathcal{F})$ が exact sequence であるということである

ここで \mathcal{F} が flabby resolution というのを定義したい

\mathcal{F} が flabby resolution とは $\forall \eta^m (m \geq 0)$ が flabby で

$0 \longrightarrow \mathcal{F} \longrightarrow \eta^0 \longrightarrow \eta^1 \longrightarrow \dots$

が exact sequence となることである

\mathcal{F} が flabby resolution とする

$0 \longrightarrow \mathcal{F} \xrightarrow{\iota^0} C^0(\mathcal{F}) \xrightarrow{\pi^0} \text{Coker}\iota \longrightarrow 0$

この exact sequence にたいして $C^1(\mathcal{F}) = C^0(\text{Coker}\iota^0)$ とし, $C^0(\mathcal{F}) \xrightarrow{\iota^1} C^1(\mathcal{F})$, $\delta^0 = \iota^0 \circ \pi^0$ とすると

$0 \longrightarrow \mathcal{F} \xrightarrow{\iota} C^0(\mathcal{F}) \xrightarrow{\delta^0} C^1(\mathcal{F}) \xrightarrow{\delta^1} C^2(\mathcal{F}) \longrightarrow \dots$

となる exact sequence ができる. これを \mathcal{F} の canonical flabby resolution と呼ぶ

また一般に sheaf の exact sequence $\mathcal{F} \xrightarrow{\alpha} \mathcal{G} \xrightarrow{\beta} \mathcal{H}$ に対して次がいえる

$\forall U \in \Omega \quad \mathcal{F}(U) \xrightarrow{\alpha_U} \mathcal{G}(U) \xrightarrow{\beta_U} \mathcal{H}(U)$ について $\text{Im}\alpha_U \subset \text{Ker}\beta_U (\beta_U \circ \alpha_U = 0)$ である (複体)

よって canonical flabby resolution と上のことから次の exact sequence が複体となる

$0 \xrightarrow{\delta^{-1}} \Gamma(X, C^0(\mathcal{F})) \xrightarrow{\delta^0} \Gamma(X, C^1(\mathcal{F})) \xrightarrow{\delta^1} \Gamma(X, C^2(\mathcal{F})) \longrightarrow \dots \quad (\delta^q \circ \delta^{q-1} = 0)$

そこで $H^q(X, \mathcal{F}) = \text{Ker}\delta^q / \text{Im}\delta^{q-1}$ とし, これを \mathcal{F} の q 次コホモロジー群と呼ぶ ($H^0(X, \mathcal{F}) = \Gamma(X, \mathcal{F}) = \mathcal{F}(X)$ である)

2.7 因子

M を複素多様体とし, M の開被覆 $\{U_i\}_{i \in I}$ と, 各 U_i 上で与えられた 0 でない有理係関数 φ_i を考える.

さらに $U_i \cap U_j \neq \emptyset$ のとき, 各 $U_i \cap U_j$ 上で $\varphi_i = g_{ij}\varphi_j$ となる $U_i \cap U_j$ 上の正則関数 g_{ij} で 0 にならないものが存在すると仮定する. これらの条件を満たす系 $\{(U_i, \varphi_i)\}_{i \in I}$ を因子の局所方程式系と呼ぶ

二つの因子の局所方程式系 $\{(U_i, \varphi_i)\}_{i \in I}$, $\{(V_\lambda, \eta_\lambda)\}_{\lambda \in \Lambda}$ をあたえ

$U_i \cap V_\lambda \neq \emptyset$ なる任意の $i \in I$, $\lambda \in \Lambda$ に対して φ_i/η_λ が $U_i \cap V_\lambda$ 上で 0 にならない正則関数であるとき, これら二つの局所方程式系は同値であると定義する. この同値関係による同値類のことを M の因子とよぶ.

2.8 変換関数系

M の開被覆 $\{U_i\}_{i \in I}$, $U_i \cap U_j \neq \emptyset$ なる $i, j \in I$ に対して, $U_i \cap U_j$ 上で 0 にならない正則関数 g_{ij} が与えられているとする. g_{ij} が

$g_{ii} = 1 \quad U_i \cap U_j \cap U_k$ 上 $g_{ij} = g_{ij}g_{jk}$

をみたすとき $\{g_{ij}\}$ を開被覆 $\{U_i\}$ に属する変換関数系とよぶ. 同じ開被覆に属する変換関数系 $\{g_{ij}\}, \{h_{ij}\}$ が同値であるとは, 各 U_i 上で 0 にならない正則関数 u_i が存在して $U_i \cap U_j$ 上で

$$g_{ij} = u_i^{-1} h_{ij} u_j$$

みたすことであると定義する

2.9 ample

X 上の因子 L が ample であるとは, X 上の sheaf \mathcal{F} で $\mathbb{N} \ni \exists n_0 > 0, \forall n \geq n_0$ に対して, $\mathcal{F} \otimes L^n$ が global section により生成される.

2.10 very ample

X 上の因子 L が very ample であるとは, $i: X \hookrightarrow \mathbb{P}^n$ の埋め込みにより, $L = i^* \mathcal{O}_{\mathbb{P}^n}(1)$ となることである.

また L が ample であることと, $L^m (\exists m)$ が very ample であることは同値である.

2.11 セールの双対律

X を複素多様体とし, L を X 上の因子とする. $\dim X = n$ とする. このとき次が成立する.

$H^i(X, L)$ と $H^{n-i}(X, K_X \otimes L^{-1})$ は双対空間であり, その次元は等しいつまり

$$h^i(X, L) = h^{n-i}(X, K_X \otimes L^{-1})$$

2.12 小平の消滅定理

L を ample な因子とする. このとき次のことが成立する.

$$(1) h^i(X, K_X \otimes L) = 0 \quad (\forall i > 0)$$

$$(2) h^{n-i}(X, L^{-1}) = 0 \quad (\forall i > 0)$$

(1) と (2) は上でのべたセールの双対律によって同値のことであることがいえる. ([2] の Remark 7.15 参照)

2.13 Del Pezzo surface

surface X が Del Pezzo surface であるとは, ample な因子 L に対して

$$K_X \otimes L = \mathcal{O}_X$$

となるものである. またそれは \mathbb{P}^2 を最大 8 点まで blow up して得られる surface であるか, $\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ である. 標準因子の自己交点数を調べることで分類でき, 1 点 blow up することで自己交点数は 1 減っていく. つまり X が Del Pezzo surface で $K_X^2 = 6$ ならば, $K_{\mathbb{P}^2}^2 = 9$ であることから 3 点 blow up による Del Pezzo surface であると分類される.

2.14 K3 surface

surface X にたいして, 標準因子 K_X が trivial であり, その irregularity が 0 であるとき X は K3 surface である

2.15 ramification divisor

X, Y を n 次元 smooth projective surface とし, $\varphi : X \rightarrow Y$ を正則写像とする. このとき X の各点 P での局所パラメーター (x_1, x_2, \dots, x_n) および $Q = \varphi(P)$ での局所パラメーター (y_1, y_2, \dots, y_n) をとって, $\det\left(\frac{\partial(y_i \circ \varphi)}{\partial x_i}\right)$ によって定義される X 上の因子を R とする. あきらかに, R は局所パラメーターのとり方とは無関係で, φ によってのみ定まる. また, T_P を X の P での接空間, T_Q を Y の Q での接空間とすると, φ によって T_P から T_Q への線形写像 $d_{\varphi_P} : T_P \ni \frac{\partial}{\partial x_i} \mapsto \sum_j \frac{\partial(y_j \circ \varphi)}{\partial x_i} \frac{\partial}{\partial y_j} \in T_Q$ が引き起こされ, $\text{Supp}R = \{P \in X \mid d_{\varphi_P} : T_P \rightarrow T_Q \text{ が同型写像でない}\}$ である. この R を φ の ramification divisor という.

2.16 標準因子 K_X と K_Y の関係

2.15 のように $\varphi : X \rightarrow Y$ および R をとれば, $K_X = \varphi^*(K_Y) + R$ である.

証明は [2], 5.2 を参照

3 本題

X を smooth projective variety とし, $\rho: X \rightarrow \mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ double covering とする. $\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ の第 1 成分への射影を $p: \mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1 \rightarrow \mathbb{P}^1$ とし, 第 2 成分への射影を $g: \mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1 \rightarrow \mathbb{P}^1$ とする. これにより, $\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(\alpha, \beta)$ を次のように与える. $\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(\alpha, \beta) = p^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(\alpha) \otimes g^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(\beta)$ とする. これを用いて, branch locus B を $B \in |\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(2a, 2b)|$ ($a, b \geq 0$) とする.

Main Theorem

(1) $a = b = 1$ のとき,

surface X は 5 点 blow up による Del Pezzo surface である.

(2) $a = b = 2$ のとき,

surface X は K3 surface である.

Proof of Theorem

まずは surface X の構造を調べるうえで必要な標準因子 K_X を求めたい. 今 ρ が double cover であるので ramification divisor R は $2R = \rho^*B$ となることから, $K_X = \rho^*K_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1} + (\frac{1}{2})\rho^*(B)$ となる.

そこでまず $K_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}$ がどうなっているか見てみると, これは最初に与えた射影 p, g を用いることで $K_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1} = p^*K_{\mathbb{P}^1} \otimes g^*K_{\mathbb{P}^1}$ とあらわせる.

また $K_{\mathbb{P}^1} = \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-2)$ であることから $p^*K_{\mathbb{P}^1} \otimes g^*K_{\mathbb{P}^1} = p^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-2) \otimes g^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-2)$ よって $K_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1} = p^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-2) \otimes g^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-2) = \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-2, -2)$

を得られる. $B \in |\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(2a, 2b)|$ ($a, b \geq 0$) であることを考慮すると標準因子 K_X は

$$\begin{aligned} K_X &= \rho^*(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-2, -2) + \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(a, b)) \\ &= \rho^*(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-2 + a, -2 + b)) \end{aligned}$$

である.

(1) $a = b = 1$ のとき $K_X = \rho^*(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-1, -1))$ よって $K_X \otimes \rho^*(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(1, 1)) = \mathcal{O}_X$ となる. $\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(1, 1)$ は very ample であるので定義より当然 ample である. また ρ によって引き戻された $\rho^*(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(1, 1))$ も ample である.

よって X は Del Pezzo surface である.

そこで K_X の自己交点数 K_X^2 を求めると, $K_X^2 = (\rho^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-1, -1))^2 = \deg \rho(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-1, -1))^2 = 2(p^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-1) \otimes g^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-1))^2 = 2((p^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-1))^2 + 2(p^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-1))(g^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-1)) + (g^*\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(-1))^2) = 2(0 + 2(-1)(-1) + 0) = 2 \cdot 2 = 4$ をえることから, X は 5 点 blow up による Del Pezzo surface である

(2) $a = b = 2$ のとき $K_X = \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(0, 0) = \mathcal{O}_X$ つまりこのとき標準因子が trivial である. そこで \mathcal{O}_X の irregularity $h^1(\mathcal{O}_X)$ を求めたい

今 ρ が double covering の写像であることから exact sequence $0 \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1} \rightarrow \rho_*\mathcal{O}_X \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-a, -b) \rightarrow 0$ が存在し $\text{Ext}^1(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-a, -b), \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}) = \text{Ext}^1(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-a, -b) \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}, \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}) = \text{Ext}^1(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}, \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(a, b) \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}) = \text{Ext}^1(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}, \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(a, b)) = H^1(\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(a, b)) = H^1(\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, K_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1} + \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(2 + a, 2 + b)) = 0$ となることから, この exact sequence は split し

$\rho_*\mathcal{O}_X = \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1} \oplus \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-a, -b)$ となる . $h^1(\mathcal{O}_X) = \dim H^1(X, \mathcal{O}_X) = \dim H^1(\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, \rho_*\mathcal{O}_X)$ であることを考慮して , 今の結果と $a = b = 2$ という条件を代入して計算すると $h^1(\mathcal{O}_X) = \dim H^1(\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1} \oplus \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-2, -2)) = \dim H^1(\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}) + \dim H^1(\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(-2, -2)) = \dim H^1(\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, K_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1} \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(2, 2)) + \dim H^1(\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1, -\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(2, 2))$ を得られる .

よって $\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1}(2, 2)$ は ample であることから小平の消滅定理より $h^1(\mathcal{O}_X) = 0$ となる .

標準因子が trivial でその irregularity が 0 であるので , X は K3 surface である .

参考文献

- [1] 堀川 穎二, 複素代数幾何入門, 岩波書店, 1990.
- [2] 秋月 康夫・中井 喜和・永田 雅宣, 代数幾何学, 岩波書店, 1987.
- [3] Robin Hartshorne, *Algebraic Geometry*, Springer, New York 1977.